花鳥餘情

六

冊合十

第十六　御章

第十七　藤袴
真木柱

第十八　梅枝
若菜上葉

天理大学附属天理図書館

酒井忠康蔵書

僧正遍海

花鳥餘情第十六

蓬七市幸　　御幸

以新勅撰奏原野行幸ハ源氏廿六歳の十二月
乃事なれども行幸ハ廿七歳の二月なれ事は
右の行幸の日の事也
かゝれども行幸ハ世のいとなむ事なれ
はし一條院の御時の根元の市事と源氏の
元のいとなむ事なれ
こゝろとゝ物の詩をそらゝていと打く
なるに源氏の元氏思ひけるなり事
みるまゝに人のうちとりて事なるいく
こゝろのまゝにもしらぬ人の源氏とまう

宮内省図書寮文庫

行とは事と言ふを行はとは行事を行はとは行事
御心を行とは行とは事とは行事
かの行とのの行事つ事つ事とて
殺仕の事とは行ふ事も行きらに
なてんてうつ考ふるとこいるとこ
そて世いくは行なきやの行ものて
うれを殺仕は行とは行ふ心あふうちは
事て思のて事のの行ものあるもてなて
のあいとは行ふ事と思行くまう
行とのそとは行ものて行事ふと
思ふのふとも
りのうは行ふ原野行幸とて

野行幸は仁德天皇の御宇にはまりて仁
明天皇嘉祥二年行幸天皇仁和二年行幸醍醐
天皇昌泰元年行野延喜四年大井川延長四年小野
同六年大原野行幸中山白河院兼保元年大井川
行幸行十二月の例仁和二年十二月十四日行幸
り幸行年中行事言ふの出ふ事ふ
のの番ふ行ふ行ふとふ時行
ふ行り幸は延長六年十二月の大原野行幸
ふ例と揚て事ふ大略事アを記ふ
ふ

本朝行ふ人のきねえいやふ〇と有と
ふ伝ふ伝ふてきふ

[illegible]記延長六年大原野行幸[illegible]
[illegible]袍親[illegible]殿上侍従[illegible]
[illegible]袍[illegible]
[illegible]
[illegible]

兼保三年大井川行幸鶴飼両人　鷹飼両人皆
雲客之奏緋色之特衣袴唐錦打腰韓鞆（音靴）太加太沼岐薛宗白臂衣也和名
鷹飼随身四人錦帽子特衣袴服裬飼代衣袴
各具大飼着帽子
と乗輿御出之時の御装束は例のごとく同之ごとく
多くは大鷹飼とのごとく衣も袴もごとく昌泰
の記の家白掾とあるは青白掾と為て
ごとくなれども衣は青色なれども
安とはなりて相違なし特衣袴いまだ
わきまえの帯奏緋の冠剣の風鞆なし唐
錦打腰韓は兼保記よりごとく御装束と云
府のごとけれども下とあるべし

ごとくなれども衣の色ごとくなれども
延長六年三主上赤色とかりよりもちろの
ごとく延長四年十月大井河行幸を昌泰三年
行幸にもあるごとくなれども
ごとくなれども色の相違なし
ごとくなれども色なし（但才一のごとく
院の御保の大井川の行幸は京極殿南門
行幸の相違錦袴と云ごとくなれども
の時の御装束なりごとくなれども
法性寺南門赤色と云
はなはだ行幸と云
御ごとのごとくなれども

昌泰元年野行幸之時車中之女房賜天
顔或半身或忘霞面之見紙納言記
右大将のさうり出もうしてい
とゝ給めさてやうこいとゝ
昌泰元年行野行幸之右大将菅原朝臣供奉
給 西京拾之之如例 朱府之着之 簾之如例
と業大将い納言之下ゝ業と朱中ゝ大臣大
納い朱府とゝ給ゝねゝ
大納言ゝ給めうてやうこいとゝ
ゝさうゝ
ゝ給ゝ
西京拾之天皇服白擬御衣延喜御時大臣右近衛
場設着直衣之 昌泰元年行野行幸着御
衣白擬唐綾御衣入野之後着猶御衣之
と業野ゝ入給てのちゝ
ゝ給ゝ例を
事をあゝ
と業院ゝ
延長六年の例と
門の御車ゝ
ゝ
ゝ
ゝ
ゝ
延長四年小野行幸の服装 右業府源俊

[illegible]

[illegible]

[illegible]

と乗れきこゝにはれ霧へたりうちふるうち
やうやうはれゆくにはるかに源氏の中将
よりの文をとりかさねたる御門とあるとゝのつゝ
けるさまいとうるはしくなをあてやかなり
あるじの君おりゐ出るさまよりはつきなしわるさまの
と乗やすらひ給ひ自らうちすさびたまふ
のさまゆゑ〳〵しくいとゞ見まほしう
もてはやしきこえ給ふ
多くいわくきを
この御ありさまは思ひかけぬ御のぞみ
よりはてらくなる事ゝはつゝましくて
やうやうあらたまりたまふ
なをいとうるはしくなをあてやかなり
あるじの君おりゐ出るさまよりはつきなしわるさまの
と乗やすらひ給ひ自らうちすさびたまふ
のさまゆゑ〳〵しくいとゞ見まほしう
もてはやしきこえ給ふ
多くいわくきを
この御ありさまは思ひかけぬ御のぞみ
よりはてらくなる事ゝはつゝましくて
やうやうあらたまりたまふ

なをいとうるはしくなをあてやかなり
あるじの君おりゐ出るさまよりはつきなしわるさまの
と乗やすらひ給ひ自らうちすさびたまふ
のさまゆゑ〳〵しくいとゞ見まほしう
もてはやしきこえ給ふ
多くいわくきを
この御ありさまは思ひかけぬ御のぞみ
よりはてらくなる事ゝはつゝましくて
やうやうあらたまりたまふ

なをいとうるはしくなをあてやかなり
あるじの君おりゐ出るさまよりはつきなしわるさまの
と乗やすらひ給ひ自らうちすさびたまふ
のさまゆゑ〳〵しくいとゞ見まほしう
もてはやしきこえ給ふ
多くいわくきを
この御ありさまは思ひかけぬ御のぞみ
よりはてらくなる事ゝはつゝましくて
やうやうあらたまりたまふ

なをいとうるはしくなをあてやかなり
あるじの君おりゐ出るさまよりはつきなしわるさまの
と乗やすらひ給ひ自らうちすさびたまふ
のさまゆゑ〳〵しくいとゞ見まほしう
もてはやしきこえ給ふ
多くいわくきを
この御ありさまは思ひかけぬ御のぞみ
よりはてらくなる事ゝはつゝましくて
やうやうあらたまりたまふ

なをいとうるはしくなをあてやかなり
あるじの君おりゐ出るさまよりはつきなしわるさまの
と乗やすらひ給ひ自らうちすさびたまふ
のさまゆゑ〳〵しくいとゞ見まほしう
もてはやしきこえ給ふ
多くいわくきを
この御ありさまは思ひかけぬ御のぞみ
よりはてらくなる事ゝはつゝましくて
やうやうあらたまりたまふ

なをいとうるはしくなをあてやかなり
あるじの君おりゐ出るさまよりはつきなしわるさまの
と乗やすらひ給ひ自らうちすさびたまふ
のさまゆゑ〳〵しくいとゞ見まほしう
もてはやしきこえ給ふ
多くいわくきを
この御ありさまは思ひかけぬ御のぞみ
よりはてらくなる事ゝはつゝましくて
やうやうあらたまりたまふ

なをいとうるはしくなをあてやかなり
あるじの君おりゐ出るさまよりはつきなしわるさまの
と乗やすらひ給ひ自らうちすさびたまふ
のさまゆゑ〳〵しくいとゞ見まほしう
もてはやしきこえ給ふ
多くいわくきを
この御ありさまは思ひかけぬ御のぞみ
よりはてらくなる事ゝはつゝましくて
やうやうあらたまりたまふ

なをいとうるはしくなをあてやかなり
あるじの君おりゐ出るさまよりはつきなしわるさまの
と乗やすらひ給ひ自らうちすさびたまふ
のさまゆゑ〳〵しくいとゞ見まほしう
もてはやしきこえ給ふ
多くいわくきを
この御ありさまは思ひかけぬ御のぞみ
よりはてらくなる事ゝはつゝましくて
やうやうあらたまりたまふ

なをいとうるはしくなをあてやかなり
あるじの君おりゐ出るさまよりはつきなしわるさまの
と乗やすらひ給ひ自らうちすさびたまふ
のさまゆゑ〳〵しくいとゞ見まほしう
もてはやしきこえ給ふ
多くいわくきを
この御ありさまは思ひかけぬ御のぞみ
よりはてらくなる事ゝはつゝましくて
やうやうあらたまりたまふ

なをいとうるはしくなをあてやかなり
あるじの君おりゐ出るさまよりはつきなしわるさまの
と乗やすらひ給ひ自らうちすさびたまふ
のさまゆゑ〳〵しくいとゞ見まほしう
もてはやしきこえ給ふ
多くいわくきを
この御ありさまは思ひかけぬ御のぞみ
よりはてらくなる事ゝはつゝましくて
やうやうあらたまりたまふ

なをいとうるはしくなをあてやかなり
あるじの君おりゐ出るさまよりはつきなしわるさまの
と乗やすらひ給ひ自らうちすさびたまふ
のさまゆゑ〳〵しくいとゞ見まほしう
もてはやしきこえ給ふ
多くいわくきを
この御ありさまは思ひかけぬ御のぞみ
よりはてらくなる事ゝはつゝましくて
やうやうあらたまりたまふ

なをいとうるはしくなをあてやかなり
あるじの君おりゐ出るさまよりはつきなしわるさまの
と乗やすらひ給ひ自らうちすさびたまふ
のさまゆゑ〳〵しくいとゞ見まほしう
もてはやしきこえ給ふ
多くいわくきを
この御ありさまは思ひかけぬ御のぞみ
よりはてらくなる事ゝはつゝましくて
やうやうあらたまりたまふ

なをいとうるはしくなをあてやかなり
あるじの君おりゐ出るさまよりはつきなしわるさまの
と乗やすらひ給ひ自らうちすさびたまふ
のさまゆゑ〳〵しくいとゞ見まほしう
もてはやしきこえ給ふ
多くいわくきを
この御ありさまは思ひかけぬ御のぞみ
よりはてらくなる事ゝはつゝましくて
やうやうあらたまりたまふ

なをいとうるはしくなをあてやかなり
あるじの君おりゐ出るさまよりはつきなしわるさまの
と乗やすらひ給ひ自らうちすさびたまふ
のさまゆゑ〳〵しくいとゞ見まほしう
もてはやしきこえ給ふ
多くいわくきを
この御ありさまは思ひかけぬ御のぞみ
よりはてらくなる事ゝはつゝましくて
やうやうあらたまりたまふ

家をうせ給ふ。いかてあるへきと
三条のうやうせ給て。まつ〳〵の云い祖母の服と
ぬいのつへきまし事
さをうりて。ぬくいはいさ。むさは
すくいとは。洗濯の心とよれ。ぬきあてい物
事。ひうりとのよれ。吟味あるへき
あるうのとをとをりまちうりくすもしへきまし水とそ
いろうのとを。清い濁。密世ぬいつ
おりはやをさ。ぬりてさ。ぬ。ぬ。ぬ

さと業なり

古の法いくさ物のめいて行なり　もろもろ事を
交なるまてしあ芸の法とおもひ　いたるて
あるいろ人の古事と大変のおもひあ出る
いろ物語なりあるくまてしあ心をなる
この事一つは去を乗井の家礼法事と
ひ心つるくはなるなり
ひ人なりなりと思ふる事とをあるなり
野分の事なるあ法事を源氏の家礼もって
とあるなれ法とクタ旁いまくるのに回
ひ一つ事のなむじなりと事をしてきくは
乃和まてあるなると思あるす事を

かの つ事なるくの法あるなる法なりを
事れの家礼事をあるは思いてらるも
事みの家のなり
ふるるにいまて様なるなわるれなるけるなるなり
三つ家の交いまるなれ元の家礼あ和毎を源氏乃
かのるあるいろ人いるなる交乃法毎をもるの家を
源氏の法毎といるあるるいるあまるを徒
毎い歌毎なるれかとるるるるるるるるるるる
るるにつまてもこの家をあいもるとを思ひる法定
いるやるれ法るよ　いるやいるまるまんを
るるをるるくるもにまるるるれまるるる　ふるるけこ
ひくるもの家なるる

はくはあ家のはさうすく
はらとうとや　こき紅のとうとうと弐ら紅傳ら法
かゑのかゑかゑかゑをくくくうくくくうもあう
かゑ日をクゑまあ付ふをくくくくくくくくくまう
と楽未つむ行の石ふ弓かゑかゑ心のつもれい
ふのとくくたうとうはくくのゑ玉勢石の弓
きてゑまいくくくられうかゑゑとうと神と
わくてはあ弓ふ我ふくくくくくくくくかゑ
ゑたりとみうれとと助ふくくこれはくかゑや
いふ事ふゑよくゆふかゑゑふくゑかう
くうとかくくてくくくくくくくくく

[illegible]

[illegible]

[illegible]

と多くていとほしう
中将もあまりのいとをさなさ
をうらむとて
中将は兄之あつそ[illegible]元い妹之[illegible]て俗名序位
の素素嗚尊と天照大神の御[illegible]
つうさ[illegible]
こゝろ[illegible]
[illegible]
[illegible]

いつる心もあるべしとて人やうにまうすなり
なの花の家のやうにあるべきなれば
ふちとなるべきものにあらねば
みちのくにてなるべしとや
かとりのもとにいつる新の春はけてゆくべし
うりはみなちりはてぬの家のいとなみやうにあるべし
白梅
むめの花は神のけうとわむまれぬるまいき
と葉にちりはてぬとよむ野といつる新の心
ふるうちに春はてぬとまつのはうにあて
ちりけれはなるいむしさはれはきゆりと
かちに行くべきはけるなれはうてもはなれ
ちりはてぬ事いとを作りとむつれ若の

作りのれしぶ新のんしやせてのまとて
てうとしつる新とちの何ようみくきゆう
ようまきはなへいつるとしつるみくられんは
きちて作るべ
はるのはのもきはしたはてうちや
かとしまのむつとはしいとまてんとまて
まへりなりいはもてまくむ野い
をやうちいはのはんのたちうはなときしてて
ちはれんりりはてくべし
さてをへんはいたるまつまてらんいてはのまん
むつとと女市后ようはくるやうやうとう
へをてやうはいはまるう

[illegible]
かのこと[illegible]
[illegible]
[illegible]の[illegible]
[illegible]
[illegible]

[illegible]
[illegible]
[illegible]

三つは拾ふ者の所へ
よとていたらかんもちをくまの
うちもちゐる事あるなり　尚侍の古人の事
ほとうつんこうはいあるといふをみく
むつ氏六人の家の門の古木あるうち
人ゐ事源氏のところ事きいてさんみ
童は源氏のもとつ方へあるとゝのきう
ねかこゝやとゝ行ゝ夕きりかゝること
うちやうこと
源氏の古ゝうゝにくもりゝ事とゝきう
ゝゝいつゝう
市ゝをゝ月ゝかねゝ

この月八月迄祖母の服なる十月ゝれたる
うゝの事ハ四月ゝ
こゝ市ゝゝゝくゝきゝなとゝあるねく
ゝやゝとゝおゝしきゝゝきゝてゝらゝけゝ
いゝて源氏の市ゝゝゝくあゝゝ三条
の家ハ服ゝゝいゝゝのあねゝなゝう
ゝゝん事ゝゝゝの子ゝ病ゝゝ心ゝゝ
なれゝなんゝ藤ゝゝんゝあゝゝゝ
ゝゝいゝゝ思ゝゝ
大変ハゝゝゝ多ゝ
ゝ源ゝゝ
ゝゝをゝゝゝゝゝゝゝれゝ

きてうしの花行き

四方の御女房に源氏宰相にとそのよ
とそれわすれがたきまゝに心ゝ思ふ
ウタ　ケノ　秀　きうしの
ゆへなるべし

殿上の花のいとゆかしうきこえ
らるゝけふ一日あらんにあはれなるらんとも
とのこゝろ　一日　きこえ　はつ　はな　蘭

うちうちの人は思ひよるべ
志貴家集　三月はかりにあるとうちうちの人とも
桜　時雨日花うつるこゝろ　私の　色　ものうつり
はつ　うつり　うつり

藤　菊　姫　射　時　力

おなじ人の家にはつかのうちうちの人と
宰相殿と宰相殿と篭りこもる
さの心をたゝこめこゝは義之の人の月をあはね
まとをうちうちとはつの心をあはね
いとはるくまさちまも
まと

思くまあるや　物のうれあるまゝの心
はつ
いかなる事をうれへてよそに思ふ人のなりゆ
月をはいかゝとはつ
九月はいつも月をはいつ
月あるうの月をうの月をうくまて
志貴家集
なるれとなをうとをうてうるの月のうはけうとわく

と葉こそはうつのけはいはしとれ木のけあれ
いつもふかきえちとらうはすてさてこそまふはいはう
かつてまのうつくとせうをさてあるべ
やつこまとふこはいはうとあり
こゝろとうしふんあるうの法
かつてまのふこはいろ事我心こそ事
人中ちかねまといつて
はいろいろはさていつもさくくて作ふこと
むつこれ在事ふこはいはうあく
思ふこゝとみつとうん法
いろこの様へとうん文物ちまうまりあり
かつてまのはいとはいとの思て文とうはいまりや

所へ入り事はいはいこを思ふこと
れのこかつのこもこてしーや
はいはうはうはうくくあはうきと
もつこれの法也

大将はこれ中将ちの法のけはれはいはうはい
こうはう

うつかたの大将前右のうれはきあて変といん
とおはけちれとこれ御中ちうれとおや
ちはきちて法こてあて変こきこ法へまわて
とおかけふ右大将殿の中将これおちんはう
これ中将ちうはうはいこくかこはいる
きつくこれまちはきはあるはいきこのこ

と葉しろく[illegible]の大将もあかしを[illegible]ゆかもとに
石のうきさう

もろこしより渡来
この弁の扇とかいふ
りけりの大将にこれ弁
殺日さかんとみくもるきれ紫
むらさきの紫ちるとけり白菊のとて世をうとくなる
と葉もろこしの白の雲の羽目のきくいきゆへまま
おもうのしくなる我身かうてあまはきやねさ
きにそうしいとしてんの
伊とうあうぶ下きれ雲をはらて
はの葉の下をれうる
市はいさうそうあいうや

ひもとくの花つゆと春の花の花の文のはつしとしあいる
わとれたんと思もあれるおにいつ海ていき海りたん
[illegible]れれとしてわをれと思まさいつ海ゆていき海りもん
人をみるあるうあるうあるうきくくくれをいふ
あるうあるの花をあはとあはつ花
ようとを春ーくあてはを
まのとしふ
ものもてをむあおいにあるとを雲やをけ
はをの心いりは花に花ーくあるよりてあい
んあてりみむあるれとあるとを雲ばて我ハ
えををうねるいをむつれ我身の文はくの
をとんをあるね中なるうくををうとあるを

かこちかまくとまをしてをわまをすね
とをしんし
をんなをはんしんをいをしををんをんをすんまを
をのの御心をきめくをみをるをまをるんを
おをををいを思ををとを

遊女横笛

以歌為名源氏物七巻の十月うあをを世
八巻の紅葉をの事はを白をんをうを巻の遊
うをみをきををめをんををををを
をををいを巻をの大将と弁の御ををん
をををををををををををををを
事を内侍のかををををををを

みをを御事のををいををををに絶ををは
御をををををををををを人をををを
をををををををを人をを侍をを
きををををを源氏の巻を内の御をを
をををををををいの月ををの
かををみを巻ををを弁の御をををは
をををををををををををを
の御ををををを思をを
いを山のをををを弁の御をををを
ををを

不山の歌をを仏をいを音薩ををををを
御ををををを

大おほ石山の観音まうでの事とおぼしきの
りなり

えまうでこそ井よりもつれ弁の
おもひよりはるかに思ひつるようてえまうでらて
てもうれしかりけり

寺のきんをあらはれ寺もしく
石山寺のれいけの霊場ほもあらはれたる
なるにのすがたはなくて
なるべくきをこれまで
なるいまさらをかしく
しきをあるいかなるかの家くく寺すちのいかてなく

しきをあるかたかたかたけるあ寺
すちとかてうや　なくかりあるの心へはるなる
内侍所の事おぼうるはなりて女房をを内侍をを
内侍の中より尚侍典侍章侍女孺これ宮の宮あり
弟月よい女房ををなるのこれ沸めくまい
つをはをよ事あるを
すくよりあるこれはるのの人をなるしくい
いきくるの大将の事
世いのあるの身のをまて
いのよるるり
おりちくくはるのとをるいのをちちちと
おりちくくはるねとをい源氏の君のの

元より客事なりけるを人さりあるべきわたり川
みくいわきこえてしらたきんと思ひらん人の
潮とはなりさるらんと
みなせ川ふるねさはいとをかしかの海のみをのおもてきこえん
地獄の絵とみくるあるこ
こなせ川わたりもあるうるはしくもとわたりてそこむ
と業はしらいこ遠川のうちまれ罪人のむとてく
事之脱衣翁　脱衣婆
市てのさはりいりはるこすけきこえん
源氏まつれ元と客事あるいて行海の底
たるおをなるやうやくもしまし真実なくこまれ
くさいとと拾みてはるるるこは実

事のなりけるうとはるうるみうてあるの事
ちりりはきこ源氏きんときこはるもとうり
いるるい行るうや
かりるうるいときてみるの人今とうり事さ会
きるくてもいるまるいるるもいるるいきよ
めるる心之　源氏の事なりるるいるるの元み
客事なりるるいるるれ何るんるるる
元りかるるはるまるやるるるるむ　るる舞事之
るんるるるるく行きは　きるれる心之
するの世ものるるるるるるるるるるるるる
られるるるるるるるるるるるるるるる
るるの元と元るるるるるるるるるるる

つくづくの志わすれ給ふ事
かたらひなれいなきさまにて　源氏物語
人の名ばかりつたへもなく　人あつかひ見
東一よいうつくしくなれていられぬ
ものかはせてうれはしくきき
てくちをしけれ
ふくろ草にはれ雪もうみしらぬ
雪のよいあさうの面
ほうい出の所とかたり
心をくらう
ふとときうて四月のつ
ぬうほうのとうやうにきてこと
氣味あるくき心
ぬきうほうのとうやうにきてこと

行事
世界のうつくしき事合給ひ
きかせをきなされ
つをきなされ
おさけ
世界の出雲の所
はきうつる
女房ともふれ
玉の高貴女の
とされる事
とかきやう
冷泉院の女房
秋好中宮
ぬうほうのとうやうにきてこと

河海にいる神きと白とをうして身に出るかう
人のとりてまるうちに行うみやつるとあるう
をとられ作りられ身にまるうあるうあるうとまれ
作るうやいてやつるるしたるうい実法之
りけうの大将といる頃之
一巻をうられりきて
或るうあるの所賀むうるれのうくいとまん
たまつしし女つまこ所
大将の云くわり給てうけきて
大将のうれきのうる実仏うるいる給
つ所事をきてのまつ事之
きうは云ういきりきいくしきんもりれあと

小のうつうたいきりの心も思より給うあとあるの
あるれさまきてのまつ事之
あるうのけるうむと
あるうにいるくるいるうむとるいるうと
あるうの頃之
あるにて時のうるうの心のいるうめてうり給
ふまは或るの事れ頃之
いてわくまうるうを作るる　これてもまを思
のあるの頃之
れとをきんうるれあるい　ほる茶中納言の尼之
作るの云八八うりて　ほるた大寺とみくうり
なるくるるまつ事とをけまるの

なをいとしくさかのうへ我身の事とおぼゆる
かぎりの事へ　新院なる事とおぼゆる心
うちまもるなり　なをはかくい　ゑれうり
うへうへてさいてせてきたり行
西園寺高侍新位諸侍所陣人々奏慶賀
中　諸司陣ニ出ル　中宮　中宮
の清女下仕候所　内侍一人　生子傳奏　書司一人　相高　結禄
女房ニ敷ル入　敬侍京　女房　東姓　妻
して出るいつのまにか内位人おもてくるれうと奏
まてさいつく内位人おもてくるれうと奏
ゆへわまてすなちめ家の女房とうはうく
退出とうのえけ初級のもとうの云ふてうち
ゆへ行へきうてうんれいんうまて

をゆはりのてうこんてうう
わうのはうう云いむしいてうみく
初位はかりの事なる女いかてゑ同
大将殿の方云　ひまはのうの侍の嫡子女式
うへうゑの出女子まうはうはきんうと過
うへうゑを女房をうをうまんとやうくも
はうへうむうれ事をうはうすうてて
心やはへきの事をかうのうの事とうへ
おうへの心おうてーきのかうてうのはま
うへうの事は
たうへはゆ中の云れ事へ仏おうてーきい踏
うのまうはうへうへうの事うれ云ふ云ふ

沖ゆきされあるて陸にて行てきたりてこれ
を待いてと行たりしと思ふて
うきをうりてうりいれまいたりふくふそこん行
者ふの家より出清長
こんはうこんもこんてうたてあるく行く
我うりゆくといふる心うり者ふこうれのうり
かの沖ちろこんいあきこれもうそれうこうぶりと
源氏の沖事ともうれ心うり品をまん
おてこうんうく　このもうこうまんこ
こうこいをを思こうはんと　あつ行の廣
賀の事あり
なてこうこいあいこき蓮と心ふるあくおいてあんん

後後家武云深紫後一正は黒草女行原二石帛
一正は黒草女行原一石帛　と紫紫いあこて
うしいあこてこいあいこきといこう
たこいこ沖やいあこおいあこて
源氏の家沖ふあこうはこれいこのんを
思いこうこてをこうあこ
いこのむあこをこうねを紫と四てこんいこてあこれ
三位こういむこきれ行の家とこうあこのこの沖の
事とこうあこんこ
あこあここ沖よ
沖門の沖女事と高侍れこうこ沖とこいこん
やこ一年を行

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

花島餘情第十八　梅枝　藤裏葉

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

河海只廂者俣也而後寢殿母屋南北中央ニ妻戸
陽ニ而謂ヲ妻戸也或以陰陽ヲ以南方為敬ニ北方為陽
北方南方敬ニ中ニ立帳臺有ニ之時撤ニ次
東敬ニ西敬ニトイフハ寢殿中央而東西各有廂
東對西對ヘ寢殿ヲ對ニ同有遣戸殿ヲ對屋作
ニ服東西搏ニ屋ヲ年ニ中門作ツケルヲハ
對代トイフヘ東西對代ヘ故東對母屋ヲハ東敬ニト
イフ西ヲ準ニ
扨御若菜ニ為ニ女ニ宮ニ御ニ
ニ
ニ

源氏の元もとは村長殿なるべ
あるものなりしかるに西對さい殿
なりてあるものなりけるよりあるものたまり
名殿なるべきなりいるしみたるものとて
いつくに西對のものなりいくなりうれしと給とう
あるものなりしかるに方丈くきわめて古家殿なりい對屋
二あるりとはんしうう
八条の殿なるべの家なりしかるとはなりてかくんい
とうんあるものなりて
八条殿なるべ康親まいに明天皇なる母女御殿
四位上藤原滋子参殿自の元れあるもの
なりなりとも計なるべのうしなるみまうる西方

なりいけるを東西の御門なるべ
まりやりあるくに源氏なるべ殿なる
きてものらくるものなりて巧意所なるべ
かれ殿なる事あるはるべうく源氏なるべ事の
あるあるべ八条殿なるべ文はるべ元なるべ
らくいるべ文侍方なる侍男と東西門なる
御門まりの方よりのものなるべ殿なる道
これるべりて源氏元のあるものなるべ
のるべていくるべるべ源氏なるべ
かるべこのるべものなるべ
武殿元東廚なるべ香りつしまる童言二合下腰
る業の言二人合と置けるべ言四合い清貝極て四角

あり 高さ但 御初 て 月 と 高 五 蓋 高 五 銀 て 表
蓋の大 さ 指 さ 蓋 と 入 さ 二 合 る 八 あ り 薫 物
と 御 物 し は 薫 物 い 梅 花 荷 葉 侍 色 黒 方 平 御
但 し 蓋 の 中 る 雲 母 蓋 あ く 錦 打 五 あ り は 上
白 針 指 入 生 て あ り て 表 指 ま と る り
号 入 惟 茶 高 二 合 打 る 五 同 申 て 一 合 る 行 と く
あ る 蓋 三 ね の さ る 祝 の て い あ り 一 合 と る り
ま い と る あ り つ 祝 入 銀 器 の 具 の 拵 る 鶴 の む
し る 台 蓋 と る て い れ る ま い ね
入 ふ ち ふ 生 て 切 作 る は 台 御 る 高 帳 の 方
す は る 也 東 西 あ り て 一 四 器 は 茶 る も 入 惟 同 申 て
西 厨 子 の ま た 膳 造 御 高 二 合 打 る 五 あ り 梯 し 造

御 あ り 二 合 る る 切 角 の 高 る り 下 膳 梯 高 二 合
丸 角 る り 肩 梯 入 懸 る 硯 あ り 折 五 あ り
と 茶 毎 屋 御 る 東 西 厨 る る 高 八 合 あ り る 中 二
合 い 高 蓋 の 高 と 東 の 厨 子 の る と く 一 合 り
茶 蓋 四 作 る く 梅 形 の 作 り 薫 把 雲 母 蓋 る の
中 る 作 る と る り き る い 銀 器 る り 用 る 作 る
る ん る あ り 一 る 茶 人 御 高 る 方 貧 家 毎 屋 の 作
し の る と 申 作 る と 茶 の 高 る 香 は 高 香 か
る る し ん る し と 入 る し 思 し る れ る 作 る と て
入 御 る と す し る 祝 の 作 る い て い 東 久 の 御 屋 の い 黒
水 精 る て と き る れ 茶 の る と み い 高 る い も れ と し る の
や る な る 御 る 作 る る 作 る と 御 香 る て て や ん

[illegible]
[illegible]
[illegible]

くるくるとまわりてうつくしき　かく申あるべき
とのたまふ
御すゝりのはこのてをみ舟流てはこの新とか
御手の筆のはこのてをみ舟流てはこの新とか
きて　きりかけをみをもきれとも
うつくしきにいろいろさまに中宮まゐりてやとて
まゐらせたる
姫君はゆゑ　私ねや中宮とり
なるゆゑとおもふ
あくもの　あやうもの　舟宮　女房　すべて中宮
まゐりたまへるあやうもの　ものゝふ
石とれ　神の御　ものゝふ　なまくてみる

わるものの下ゝうゝ　ものゝふ　ものゝふ　ものゝふ
或　扇　宮　院　ものゝふ　ものゝふ　ものゝふ
心　紙　陽　陽　つき　中
とゝ　梅　梅　梅　梅　梅
いと　いと　いと　いと　いと　いと
せと　せと　せと　せと　せと　せと
ものゝふ　ものゝふ　ものゝふ　ものゝふ　ものゝふ　ものゝふ
乃長　貞　貞　貞　貞　貞
貞　貞　貞　貞　貞　貞
古人の思ひ方を感じて思ひ出でらるる
みちくるゝ時　くるゝ乃自有宮　対

やれとゝうち方に薫あるゝ所の本分
きはゝて相ゝいらくゝられたる
多いのうへれ古むみゝ
ゝまあゝゝすゝゝゝ

見て出せと心ゝやられいろと打ち作り
一ゝの所朱雀院に西京市門の市事と志羽屋
とゝの世ゝ作りて有ゝ也かゝる事ゝゝ人と
故ゝ朱雀院の董と長者と云ふ人と志
羽屋のてまゝられまゝゝる方と世ゝ一事ゝゝ百
歩ゝ百ゝゝて言事ゝ出ゝ
とゝて百歩ゝ者と云ふゝ一方ゝゝ
さゝる心ゝ一ゝ朱雀院の董と長者と志羽屋の
百歩ゝ者と二行と有ゝ也ゝ
百ゝ百歩ゝ西京大納言の家ゝ
入ゝゝれと西京百歩ゝ者ゝ
ゝゝ有ゝ方ゝれゝて志
ゝゝ有ゝ思ゝゝて
荷ゝ家ゝゝゝれと
有ゝのゝゝゝれ二の方と思ゝて有ゝ也行ゝ
ゝと思ゝて
市事ゝ西宮殿時代
ゝ時京人金銭楠橋ゝ
の市事ゝ西京市門と
みゝ天皇ゝ西京ゝ
みゝは朱雀院ゝ
と京朱雀院ゝ
方ゝゝて
月ゝゝて有ゝは

よしの河よりきさらぎ十日とあり行海より二月
初としつゝおくるを
わゝいうてゐんふるねの行ちきさらぎ
さ来の雨のあり
文をかくもさらいらつて　助音寺
菅はらのあそんやてくれん心やすもしあるみ
菅のこゝろ　曲の中心やすもに音楽
萬の行ふねをなくまて行きこゆせよ行
なかの行ねの中侍ようせいふるあと
心あつて風ふるあるものこゝにあつあなてふきやうをう
風ふをいてらきねをふきやうをうきとあり
行雨中侍ようあまとよりてて下
の河よりきさらぎ十日とあり行海より二月
雲ゝ月とをとてそ行ねをかるのほ
ものかふふらあるゝくるくゝ心并め
侍ねゝとうゝ行ねゝのもかたゝ
ひまゝとつあり中ゝ雨きにより初
いなるねよゝ
菅のをはなのねねるゝあやまるいのやうん
ゝよゝんなるねゝ緑ゝをけるまん
行ゝとをゝをゝやゝゝゝ　若ゝ行也
いゝいゝかゝりのゝ　かゝらぬゝふゝゝん
文のむゝまゝみゝのゝゝるゝいゝそゝ
西の射ゝゝゝゝそゝ行姫中文の海ます

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

遠遠へさすれば[illegible]

[illegible]

[illegible]

いまの世は[illegible]

紀万葉[illegible]書[illegible]

万葉集は[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

まんなかすみちかたにおいたてけるものもこそ
侍ほかれ
まんなかはかすみかたはすてて
ほかはとかれなるかもあるかの
うのつかうかたすくうはたてけるうの字
すくうかくき心之
まうかねきうとも
而物をきうとかつきうよく内典の典
の書にも奉牙一寸牙二寸牙是あり
ものこと
ものきうこと内すうとも
たてまつりかの視

とうもしくはのうつくしくてのかの
あてうたるなり仏四くうをとかへて
行ての文案に者つとかうるうをとこと
ホをるをとかうこと行をすうう中陣和尚
のきうて案うをとかつきうの字の時に清の案も
みちうこと
いうにうやなとうたりいてうをつ
中前うきつかに二三人の蒙うかうるは
いうにあうとうたるかの字
きうこうたりうう　京一こと三行うたりに
かとかつ枝をまうこうきうの牧とに三行清書
おうたうかいたもお遠りがへ

あてなる家にて行はしめや
源氏物語 歌 大夫 蔵人 初名異域 叙爵封侯
安能久事 筆硯間手 と 集 とるとと
いとと 家に 世 心 物 ものいふみけるへ
人のもとにみるれるふ
獲麟 のいるいられとくへのるこをいとみるふ
人の風 とふ みを人の風 を風 を作
心 ふ るのあるいよりねまへこうはたて
絶 物の筆遊 遊 て自 風 風 ものを
まりて問 てて
さふ ものの石 万 集 とふ集 ふ 写 奏
万 集 集 女 奏 手 源氏 写 詩 作 模 見 今

序 万 家 物 五 奏 一 伝 紀 貫 模 模 一 伝 東 童 よ
人 物 同 女 奏 物 不 和 模 名 し 不 源 氏 古 模 写 奏 月 古
中 不 見 他 ふ ふ き 模 定 の 物 て ふ く て ふ 年 の
たあ と 有 て ふ い ふ を ふ ふ や ふ ね へ
延喜 の ふ と の 石 と 和 ふ 集
ら れ ふ 和 ふ 集 ふ と 延喜 の 古 代 ふ 模 を
う み ふ ふ 国 と い あ ふ ら れ い ま ふ ら 宸 筆 し あ や
か く ふ と し も 唐 唐 ふ ふ ふ ふ ふ ふ ふ ふ ふ ふ ふ ふ ふ
物 自 ふ ふ ふ ふ ふ ふ ふ ふ ふ ふ ふ ふ ふ ふ ふ ふ ふ ふ ふ
物 と あ や ふ ふ ふ ふ ふ ふ ふ ふ ふ ふ ふ ふ ふ ふ ふ ふ ふ ふ ふ
源氏 の 言 と ク ふ ふ ふ ふ ふ ふ ふ ふ ふ ふ ふ ふ ふ ふ ふ ふ ふ ふ ふ
ふ の 事 い か ふ ふ ふ ふ ふ ふ ふ ふ ふ ふ ふ ふ ふ ふ ふ ふ ふ ふ ふ

これらの源氏の君たちと教訓をまふ
事をうけたまはるにつけても
さりがたきの御門の御事と思出のみ
つきくることもなれば思ふ心あるやと
少納言の徒
なりてあきいんにまかでぬ
なりとんとしたまふ
いと栄あくらう交りうちもりおいて
源氏のこの事をのみ
うあやまりはみんの心ありるとす
こまは一段ふんあるこむ心ありるりす
こを思いつくてんのそんるけあくきんを
女をつ孫ふりとに出るはとはきみ

ふまはをみ井の殿乃事又井とのるけきまを
はたのくらつれつ殿
源氏つくらつまのみ
まはつまつ事
こらあるをもてしたはるあ
殺付はれ井とのうあい
女をいあるあとのこと
あやくく心とそれてをすんいてはるこ
をみ井の殿はいのこ
ゆおりをはやねはれるよ
源氏のをれ少納言もしとそらんとむ心
もつ事をまりはつ事いあるまきば

ケ雪ふきまいりをの行ねとうゑて
をゆきまいる
かまくらとわたれるを所をうも
ケうりの雪より三れ
ねんやゝとあるとあり
うけくさをわとれてを思ふ心れをもり
あまいわとれくもるなねい世まるふるい
をれいうみとを四ねとを井の行れを
みよんまるいうらくれわまりあるまとりの
めりう何をまはケたりれ天い雪をを
行ねまをれいなるふ事とうりを事
をまはむとあまとをそうを事
みをるとをもる

十九藤裏紙

以何為奏右衛門佐藤原朝臣
事宣旨 天平勝宝元年十月廿五日

はいうきの稲をを寧相中将いをわうきく
御いうきの稲をを明石郡天の東を
をを事を宇相中将をを
のうをまいをりをあるをいをみの行
女をもををれをを行ををを
ををを行を中務をををの雪をを御女を
いをんとのをみ行をを
かの雪をををうを思をを行ない
中務の雪れを事

[illegible]
三月廿日[illegible]の御忌日にてこらるまう
てをはり
[illegible]記元年二年三月廿七日[illegible]
寺方先[illegible]
[illegible]
[illegible]

[illegible]
内大臣の秋にあやふくあやふくあるを
礼のうへをもはまねとうとく行う頃
家礼とうるはしくすぐれたるやうに他人
ことなる雅て礼をいとことにいまの世のを
家礼とうるはしきうきたりとてとへと
いつたちの家人をたてまつりて
伴に伝あまとをたてられあまりなるよ
うれとへい内大臣の秋に嫁たる頃ほ少の
名あり男うしれ教訓をあくまの事なり
家礼の醍醐うるはしき史記とくくうへ家令の
ちへまての事いあまりとくくきうる

[illegible]
時ふくさうにきて
人とあてる所とて
宇相さうまとあちあるききうにて
まうたりうる
天皇とうるうて
ちれいうるまうとうる拜礼の家礼
とあうて
[illegible]
あうれと　迎送
あうれとうるいとやまうをうるまう
るうちうれうて
ちうへうるうれうの

雇馬樂葉頃
、安之加支末加支末加支加支和介天不己須止於比己須止波礼
、天不己須止太礼加己乃己止子於也介末宇子己之末宇之
、止々呂介留己乃以々己乃以々乃於止子女於也介末宇子己之介良之毛
、安女川知乃加見毛加見毛曽宇之太々和礼波末子己之末宇左須
、須加乃祢乃須加名須加名支己止子和礼波支久和礼波支久加名 袁

[illegible]
をけ何いあるしとも
うるとゝ[illegible]きやゝ[illegible]
しゝるゝこと家のこと
せされとあるそれ助音しまつる
いかゝ何ゝいかゝ[illegible]
ゝ何ゝ[illegible]きゝとく[illegible]例
の屋敷[illegible]ゝ[illegible]
[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]

かきつゝもゝ之故ゝ[illegible]ゝとあるかゝ
つくゝゝゝゝゝとゝ[illegible]
家のおもちやゝ[illegible]
[illegible]
[illegible]

あるかの事いかてそうに女とうとをもい
てあるかのようとおもてい
はるる人のあるとの女のやる
うるうる心を弁かのはるまつんと
うるあるとかたくきまく絵くまくまくをはるま
はまるあるての絵のきやうるい滝の事を
をけ何いあるしとうるはるるうるを本をなく
うるうるとはるる心うきやうるかるれること
しるうるとれ家のとれとれ助音しまくう
やされとあるるかれて京の何るいるるるとる
いる何るるるるるるとれ家とくまくまと例
の展ばるてうる強るるるるるるるるるるとる

かまるるるる故るるるるるるるるるるとあるる事とる
つくるるるるるるるるる

いきあうこと　かくていて人をいかに
わかいかのかいて
こころのとこそさ　いくまうちはき
かの将のあるとこと　時々参れば
門口のうとと西条　こいあくあるとも
ようとりのうと　きくかと思ふに開入
なりこれいくまと　ものいくまい
ものとかいてうと　ものやうにうと　行たて
いうとこあうこう　思ふていと　心ゆれ安い
きくかと思ふこと
あるかのいとこ門口いうあり　写あるきの
あのうと歌あるかく　ものいとこ門口の開あり

紙いてうとかうこ　申たこと知らあるこ
をうにくくきこと　門口のあるかのこいあるせうも
紙作部を改宿舎　応徳井陸奥国外敬信二年
十三人半
擬部（ナリベ）　廿八人　白河菊多刺（セキ）寺　百人　自余畧
右直国府外敬信等　如件　有宣兼知依件給井
延暦十八年十二月廿日
七条男の西方に　奥州　ものくこと
ものせうもと　門口　人あるまれに門くちの開
ものくあるかいて　あるまれに門くちの開
あるびること　ものあるこ　あるびいあるかこ
それとあること　いそまふ　なること

[illegible]
[illegible]
[illegible]

をつくねといふなり
打とうかまつかの中ゝ
うすきかの中いう作毛田
宰相殿はすゝ[illegible]きの中
ゆまて志あるとあやはれ
すゝ[illegible]ゆいこきゝ毛田こゝあやいかゝ
こゝかゝていかゝといふ
くゝんより　国史云和銅七年六月八日清倉仲仏
打大法師信静安於清原殿始行灌仏事
あゝかゝはやきゝ毛田ゝ　灌仏の布施ゝ
稼と用ゝと中ゝ作ゝ作ゝ
みゝかゝを作ゝ

公支根源
上皇於つゝ毛のゝ[illegible]みを拭ゝ[illegible]
上すゝゝ白あの机ゝ[illegible]

なゝけゝゝ行ゝゝ人ゝ
の中ゝ
水をもんや
ゝゝゝねとい堂周あゝ奥ゝ水流の通と
ゝゝ[illegible]
山方ゝゝゝ人ゝゝ　ニゝ東西ゝゝ井の
ゝゝのゝゝ毎
あゝちゝゝゝ　ゝ井の[illegible]毎
かゝて六条院の井ゝゝ
明石姫君の東宮へ参ゝ
毛いのゝ[illegible]ゝ
むゝゝゝの人面の日ゝ

[illegible]

[illegible]

[illegible]

人ゆゑにまうけたまへる事を
むかしをもひいでゝ侍りける事をいつ
こゝろにてよみてさぶらひける
明石のうへのもとにまうでたりけ
るに女房のうへにあひたてまつる
ゆゑ侍りける事をなげきて女房の
ところへ
きてはあひしの姫君はいまは女房
とはなりぬる事をゆゝしきものに
おもへるあはれなるこゝろ
うへの御ものゝ心とけぬる夜
ふくるまゝにあはれなる物
かなしきものかな

長恩天皇以下諸帝の御代にて
の信仰にて
号歸
敦明
年宿
所なる
院なる
なるつ
内の
小一条
せ給
長恩天皇以下諸帝御信仰つゝ
きたる上天皇の
きたる人の院号あるべ
信仰つゝ
敦明
小一条院と
歸
院司
尊
事
物語
女
上天皇
院の
事
上天皇
院
院号
院
院
院

東方東宮の食封に二千戸の延喜式に
のせられたる小豆院に東宮院の食封とて
まうされたるいまは法皇の云いたる大
法師院号とて法皇の食封
に禄令に三千戸のうち小豆院の例
とて三千戸のうちにくらべ
やはりくらべとの例に三千戸のうちにくらべ
ちうまうして法皇の院号にて食封
とくらべられたる事なれば別に法皇
恩なり 古来院の小封の事なれば
引見すべきなれば法皇封戸二千二百
ナリとうれうあやまれる法令に三千戸分明

しかの例とあるあて院司とをのうさぬとみ
あるあての例なり法皇は
院司なる人なれば院司なる補せ
ぬ人なれば院司なる例とは
あらず禄に蔭位あるべき
犯人の衣服令一位深紫二三位浅紫四位深緋
位浅緋六位深緑七位浅緑八位深縹初位浅縹深紫
紫は行て深紫浅紫は行て深緋に加
浅緋に蔭と前に加て深
浅緑に蔭と蔭藁と蔭て深
今世の位犯三位以上と蔭藁は一条院の

[illegible]小野[illegible]兵衛
[illegible]
工夫のやとり[illegible]
[illegible]
[illegible]二位三位の法皇
[illegible]一位の祝の[illegible]
[illegible]
中納言[illegible]時[illegible]
[illegible]
位三位の時宮の[illegible]
[illegible]天の羽[illegible]
[illegible]

二条[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
中納言[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

おなじて志ゑ[illegible]
六ちの紙のうへ[illegible]
遊道けうの布草みを錦と志られたる之
らんうのいけるふ[illegible]
のを[illegible]
ちいさ紙ふるゝとくらう

御記延書八年五月廿八日法華堂清種[illegible]
[illegible]作人捕池奥右衛門
奥奉賀別御前料理佐膳給侍従
人陪下御給侍従
七疋騎射小度
同十八年二月廿八日入泉苑東[illegible]
右の糸ゝ組捕池奥付御厨子所 御供之南庭傍下

御給侍従未及四一刻競馬
同年十月八日幸朱雀院方違作方御馬
右馬寮[illegible]
[illegible]人々昇御桑入疑御前池の鯉射十餘度 御前
御供之女東砌下 御給侍従
[illegible]
[illegible]
朝朝日幸水ハ皐[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

俗名增島彦帝道室秀夏信